

「それでも僕らは夢を見る」

脚本

小林

昂平

登場人物

- ・桜井 一（28） 週刊少年漫画を連載しているマンガ家、真面目でお人好しな性格
- ・木田 葵（28） ハジメの恋人で「いちくん」と呼ぶ。夢を持たない自分がコンプレックス
- ・有田 心平（20） ハジメと同じアパートに住む青年、見た目はチャライが根は優しい
- ・胡桃 ハナ（17） 心平のバイトの後輩、考えるより先に体が動くタイプ。
- ・黒沢 光子（23） ハジメのアシスタント、オカルト好きだがそれを公言する勇気が無い
- ・大森 太蔵（38） ハジメ家の近所に住むおっさん、酔いどれチートギャンブラー
- ・倉持 美沙子（42） ハジメの担当編集、仕事の出来る女で男が近寄りがたい雰囲気
- ・市原 秋治（28） ハジメの幼馴染、ギャグマンガ家で本人もマンガみたいな明るい性格
- ・夢喰（年齢不詳） ハジメの夢に住む謎の存在、道化師の風貌と妙なテンションが混乱を生む

0、夢の世界

葵「将来の夢って何だっただろう、小学生の頃はケーキ屋さんで、中学生の時は陸上部だったから陸上選手。高校くらいからあんまりそういう事を考えなくなつて、気が付いたら語れるほどの夢を無くしてしまつていた。そして今の私は夢を持つことを夢見ている」

心平「俺の夢は、世界一のミュージシャン！実家を継ぎ継ぎうるせー親とか、現実見ろとか言う周りの連中なんて関係ねえ！俺の人生は俺が決めるんだ！！」

ハナ「アタシはダンサーになりたい。勉強なんて出来なくても大好きな事を一生懸命続けていけば、立派な大人になれるんだってそう信じてる！！」

光子「私は……オカルトが好きなんです。自分の好きなものを好きだつてはつきりと主張する事ができる、そんな強い人にいつかになりたいです」

太蔵「将来の夢………忘れた！！」

倉持「もう夢を語るような歳でもないわ……今の私は夢を追いかける人を応援する立場だから」

一「僕の夢は…」

秋治「俺の夢は…」

一「子供の頃から変わらない……」

秋治「あいつと一緒に目指し続けた…」

二人「漫画家」

暗転

1. マンガ「1年ちよつとのヒーロー」のネタ

暴れまわる怪人王のシーン

オヤジ「アキト君、ベルを連れて逃げてくれ。出来るだけ遠くへな」

アキト「……おっさんはどうするつもりなんだ？」

オヤジ「私は、怪人王と戦っているシャドウフアング君の加勢に行く」

アキト「何馬鹿なこと言ってるんだよ、ヒーロー寿命の尽きたあんたが行ったところで、殺されに行くようなもんじゃねえか！」

オヤジ「それでも、私の稼いだ一秒で誰か一人でも助かるかもしれないなら、

行く価値は十分にあるさ」

アキト「そんな……」

ベル「どうせ止めても無駄なんでしよう、だったら早く行きなさい」

オヤジ「ああ！見ているベル、君が生んだヒーローが勇敢に戦いに行く様を」

アキト「待てよおっさん！！」

オヤジ「オヤジーマン、出動だ！！」

マンガネタ終了

心平「いやーやっぱおもしろえよな『1年ちよつとのヒーロー』特に最終巻のオヤジーマンが一人で怪人王に立ち向かっていくシーンとかマジ胸熱だぜ！」

ハナ「えー、アタシは断然シャドウフアング派だけどなく。普段はクールなイケメンなんだけど、不意に見せる天然なことかももうチョーカワイイ！！」

心平「分かってねーなハナは。男のカッコよさつてのは外つつラじゃなくてハートなんだよ！それが分かんないようじゃまだまだ子供だな」

ハナ「何その上から目線チョーウザいんですけど。てかモテない心平クンに男のカッコ良さを語られても説得力なくない？」

心平「誰がモテねーだとコラ？」

ハナ「やんのかー！」

一 I N

一「ちよつと二人共ケンカしない、はいやめやめ！」

心平「だつてよ先生、ハナの奴がケンカ売って来やがるから…」

ハナ「はあ？心平クンがシャドウフアングをデイスったのがいけないんじゃないんじゃん！」

心平「別にデイスってねえよ、ただ俺はオヤジーマンのカッコよさをだな……」

一「ストップ！二人とも落ち着いて、僕が描いたマンガの事でケンカしないでよ。それにこの『1年ちよつとのヒーロー』は、文字通り1年ちよつとで打ち切られた、世間的に言えば駄作なんだからさ、二人がケンカするほど大したものじゃないって」

心平「んなことねーよ、俺は超好きだぜ？『1年ちよつとのヒーロー』」

ハナ「アタシも！普段少年マンガとかあんま読まないけどこのマンガは好きだった。

バカっぽくて！」

一「うん、ストレートすぎて複雑……」

光子 I N

光子「先生、作業が一段落付いたので確認をお願いします」

一「ありがとう光子ちゃん……ふむふむ、うんOK。流石だね」

光子「いえ……まだまだです。私も早く先生くらい上手なマンガが書けるようになりたいです」

一「光子ちゃんならすぐなれるよ、自信を持って」

光子「はい……！」

心平「あーなんか二人がいい雰囲気になってるー！」

ハナ「浮気だ浮気ー、葵さんに言いつけちゃおー！」

一「ちよつと二人共、何冗談言ってる……」

光子「私は……先生が望むのなら何番目でも……」

一「光子ちゃん!？」

ハナ「あはは!先生はホントこの手の話に耐性無いね〜」

心平「なのに、今先生が連載してるマンガはラブコメだもんな……俺は『1年ちよつとのヒーロー』の方が好きだったけど」

光子「心平さん、先生だって色々と考えて……」

一「いいよ光子ちゃん。今連載してる『ドキッとデストラクション』略して『ドキシオン』は

読者アンケートでいつも下の方、正直いつ打ち切られてもおかしくないんだから」

心平「まずタイトルからしてどうかと思うわ。ドキシオンで……」

ハナ「迷走しておりますなあ……やっぱマンガ家って大変なんだね」

葵 I N

葵「はあ……はあ……いちくん……ちよつと手伝って……」

一「葵ちゃん!?どうしたの、そんな汗だくになって……」

葵「それが……ここに来る途中にべろんべろんに酔っぱらった太蔵さんと会って……」

何とか担いで来たんだけど……」

太蔵、千鳥足で I N

太蔵「うおー!!!お前ら元気ですかー!?ガハハハ!!!」

一「ちよ、太蔵さん!もう夜なんですから大声出さないでくださいよ!」

太蔵「おお先生!俺つてば今日も絶好調!麻雀で負け無しの20連勝!もう役満が出るわ出るわ…」

心平「相変わらずチートレベルで運が良いんだなこのおっさん」

ハナ「たまーのギャンブルで荒稼ぎして趣味が世界一人旅だもんね、アタシこういう人とだけは

結婚したくない」

太蔵「何だガキ共こそこそと猥談かあ?若いうちはな、本能のままにやりまくればいいんだぞー!」

一「なんて雑な絡み方してるんですか!ごめん光子ちゃん、とりあえず水持ってきてくれるかな?」

光子「はい、分かりまし…」

太蔵「ぐおー!ぐがあー……」

一「……寝てる」

心平「自由過ぎだろ…」

葵「とりあえずその辺に転がしておきましょう。それより皆、もう結構遅い時間だけど

帰らなくて平気なの?」

ハナ「ヤバ、もうこんな時間!?最近帰りが遅いつて親とケンカしたばつかなのに…」

心平「しゃーねーな、家まで送ってつてやるから。とつとと帰るぞ」

ハナ「ありがと心平くん!じゃーね先生、また遊びに来まーす!」

心平・ハナOUT

一「気を付けて帰るんだよ、二人共ー！」

光子「じゃあ私も今日の分の仕事は終わったので帰ります。太蔵さんは……」

太蔵「ZZZZZZZZ……」

一「……しばらく起きそうにないから気にしないでいいよ、お疲れ様光子ちゃん」

光子「はい、おやすみなさい」

光子OUT

一「さて……後は太蔵さんをどうするか……」

葵「いちくん」

一「なに？」

葵「はなしがあります」

一「後でいい？とりあえず太蔵さんを……」

葵「はなしがあります」

一「太蔵さん、ハウス！」

太蔵「バウ！」

太蔵OUT

—「…何怒ってるの？」

葵「もう、またLINE見てないでしょ！話したい事があるから今日会いたいって朝送ったのに！」

—「……あ、ごめん……」

葵「……昔打ち切りに合ったトラウマで、アンケート結果が出る日は仕事用のLINE以外の通知を切ってるのは知ってるけど、いい加減彼女のLINEくらいは受け付けてもらえませんか？」

—「……ごめんなさい」

葵「もういいけど……それでアンケート結果はどうだったの？」

—「いや、それがまだなんだよね。いつもだったらとっくに……」

携帯SE

葵「噂をすれば……！」

—「どうしよう！？まだ心の準備が……」

葵「情けない声出さないの、男なら覚悟を決める！」

—「は、はい！」

携帯SE止め、倉持IN

倉持 「お疲れ様です桜井先生」

一 「倉持さん、おつかれさまです」

倉持 「遅くなつてごめんなさい、会議が長引いてしまつてね…」

一 「あのつ……それで結果は？」

倉持 「……残念だけど、『ドキッとデストラクション』の打ち切りが決まつたわ。

編集長には最後まで掛け合つただけど……力不足でごめんなさい」

一 「……そうですか。倉持さんのせいじゃないですよ、単に僕のマンガが面白くなかつただけです」

倉持 「とにかく、まずは作品をしつかり完結させて、それから今後の事を話し合ひましょう」

一 「はい、ありがとうございます」

倉持 「それじゃあお疲れ様です。元気出してね」

倉持 O U T

葵 「いちくん……」

一 「いやーダメでした。やっぱり僕にはラブコメは向いてなかつたみたい。あははは……」

葵 「私の前でくらい、無理して笑わなくていいよ？」

一 「無理なんてしてないって！それより話つて何？」

葵 「え？」

一 「さつき言つてたでしょ？話したい事があるからLINEしたつて。何の用だったの？」

葵「あー……やっぱいいや。そんなに大した話でもなかったしさ」

一「…そう？」

葵「…うん。もう遅いし、私もそろそろ帰るね」

一「あ、送ってくよ」

葵「大丈夫。それに……いちくん今は一人になりたいでしょ？」

一「……葵ちゃんには何でもお見通しだね」

葵「8年も彼女やってればこのくらい当り前よ。それじゃあね、おやすみ」

葵 O U T

一「僕の名前は桜井一。週刊漫画雑誌『バルカン』で連載を…持っていた漫画家だ。中学生の時に好きだったマンガに影響されて絵を描き始め、それからずっと漫画家になりたくて努力してきた。20代前半で読み切りが連載され、25歳で1年ちよつとのヒーローと言う作品でデビューした。けどその作品も大衆受けはせずに打ち切り、そして再起を図って連載された今回の作品も……僕は今28歳、2度も打ち切りを受けた崖っぷちの漫画家。そんな僕が、これから先まさかあんな事になるなんて……この時は思いもしていなかった」

暗転

2、マンガ「きまぐれ神様ガブリエルさん」ネタ

隕石が落下してくるシーン

健二「ど、どうしよう！？地球に向かって突然隕石的な何か落下してくるなんて！」

康太「このままじゃ俺達みんな死んじまう……助けてルーさん！」

ルー「仕方がないのう、ゴッドパワー……はああああい！！」

隕石あつさりと消滅

健二「すげえ……隕石的な何かきれいさっぱり消えちゃった」

康太「流石だぜルーさん、ありがとな！！」

ルー「んじや報酬として、高級スーシーとテンプラとヤキニク。あ、あとガチャ回したいからギフトカード10万円分よこせ」

康太「そ、そんなん急に言われても無理に決まってるだろ！？」

ルー「よこさなかつたら、さっきの隕石的な何か復活させるからな」

康太「そんな……」

健二「康太」

康太「おお健二、心の友よ！お前からもなんか言っちゃって……」

健二「お前の叔父さんマグロ漁船で仕事してたよな？行ってこい」
康太「世の中、友情よりもお金だね！！！！お金だね……お金だね……（エコー）」

マンガネタ終了

絵・編集部

一「いやー、相変わらず面白いな。秋治くんの描いた『きまぐれ神様ガブリエルさん』

僕はギャグマンガって全然描けないから尊敬しちゃうよ」

秋治「そうだろうさうだろう！今回のネタは特に自信作だからな！読者アンケートの反応が楽しみだぜ」

一「……ほんと凄いや秋治くんは。僕より早くデビューしたのに未だに連載が続いていて、今じゃ

バルカンの看板漫画家の一人だもんね。やっぱり才能の差を感じちゃうな……」

秋治「ウジウジすんなって。大丈夫だよハジメのマンガは面白い。ただ今回は運がなかっただけさ」

一「ありがとう……ごめんねなんか空気悪くしちゃって」

秋治「気にすんな、それより今度はまたバトルマンガ描いてくれよ！俺『1年ちよつとのヒーロー』

好きだったんだからよ」

一「うん、考えておくよ」

秋治「楽しみにしてるぜ、んじやな！」

倉持 「ごめんなさい待たせちゃって…今の市原秋治先生？」

一 「はい、偶然会ってちよつと話を…」

倉持 「そういえば、二人は幼馴染だったらしいわね」

一 「そうなんです。秋治くんとは中学からの付き合いで…もう15年になります」

倉持 「中学の同級生が同じ漫画家のライバルか…中々運命的な関係ね」

一 「ライバルだなんて…僕と秋治くんとじゃ才能が全然違いますよ」

倉持 「コラ、卑屈にならない。そんなんじや次の連載勝ち取れないわよ」

一 「そうですよね…すみません、切り替えます」

倉持 「よろしい。とりあえずは『ドキッとデストラクション』連載お疲れ様でした。無事に最終回

の入稿も済んだわ。一部の層には人気のある漫画だったから終わらせるのは惜しかったけど」

一 「倉持さん、その話はもういいですよ。今はもう次の作品の話がしたいです」

倉持 「おおやる気ね。何か新しいネタはあるのかしら？」

一 「え…？いや、そう言われると特には…」

倉持 「え、あ、そうなの…」

間

倉持 「とにかく焦つてもしょうがないわ。今はゆっくりと休んで、新しいネタが浮かんだら

また連絡を頂戴」

一 「はい…」

倉持 「しよげた顔しないの、そうやってすぐネガティブになるの桜井君の悪い癖よ」

一 「よく言われます…すみません」

倉持 「…とりあえず今日はもう帰って、彼女にでも癒してもらいなさい。それじゃあね」

一 「おつかれさまでした」

倉持 O U T、 絵・帰り道

一 「みんな僕のマンガは面白いと言ってくれる…だけど結果は伴わない。気を使ってお世辞を

言ってくれているだけ…なんて考えたくはないけれどどうしても思考が悪い方へと傾いて
しまう。この日、僕は珍しくお酒を飲んでから家に帰り、倒れ込むようにして眠りについた」

暗転、 絵・夢の世界

夢喰 「おはようございマアア…ス…!!」

一 「うわわ！なになに!？」

夢喰 「初めまして桜井一様、夢の世界へようこそ！」

一「夢の世界？て言うかあなた誰ですか！？」

夢喰「申し遅れました、わたくし夢を喰らうとかいて『ムグライ』と申します。どうぞヨロシク」
一「むぐらい……？」

夢喰「ほう、意外と順応性が高いですね。こういう場合良く居る主人公キャラだと『何勝手に人の家に入り込んでんだ！』とか『訳の分かんねーこと言ってるじゃねーぞ！』とか喚き散らすのですが……話が早そうで何よりです」

一「いや、驚きすぎて逆に落ち着いちゃってるパターンなだけですけど……」

夢喰「とにかく！センセイと私は今大ピンチなのです……！」

一「え？」

夢喰「わたくし夢喰は読んで字の如く夢を喰らう生き物、センセイのお体に住み着いてから

どれだけの時間が経ったかは覚えておりませんが、毎日毎日センセイの夢を食べて

生きてきたのであります」

一「夢を食べる……なんかどこかで聞いたことあるような……ああ、確かバクとかいう妖怪！」

夢喰「いやいや、あんな下等種族と一緒にしてもらっては困りますね」

一「じゃあ……寄生虫？」

夢喰「食い破りますよ」

一「スイマセン」

夢喰「まあ私が何者かなんていうのは些細な問題です。それより……」

—「いやいや全然些細じゃないですよ！うわつ、ちよつと落ち着いたら色々な疑問が湧いてきた…
どうしよう、どれから聞こう…」

夢喰「んもうめんどくさいですね〜こういう時は『ドリームパワーポイント』略してDPPの
出番です。それっ！」

絵・DPP1

—「な、なんですかこれ？」

夢喰「この夢の世界でのみ使える便利アイテムです。これであなたの疑問もまるっと解決
でしょう？」

—「いや、殆どの回答が凄く雑に処理されて全然納得出来ないんですけど」

夢喰「それが事実なんだから仕方ありません。それよりも！今問題なのは最近のセンチが
目に見えて夢を失いかけているということですよ。心当たり有るでしょう？」

—「それは……」

夢喰「ああ決して責めているわけではありません。事情は全て把握しております故心中お察し
致します。この世知辛い世の中夢を持ち続けるとするのは大変困難なことです。しかし！

このままでは私はあなたの夢を食べ尽くしてしまう、これは非常に宜しくない事なのです」
—「夢を食べ尽くされたら……僕はどうなるんですか？」

夢喰「此度の生涯において、二度と夢を見る事は無くなります。惰性で生きる人生、

刺激の無い未来があなたを待つ事となるでしょう」

一「そんな……僕は一生夢を見られなくなつて、ムグライさんはやがて飢えて死んでしまう。

大ピンチつて言うのはそういう事だったんですね!？」

夢喰「いえ、私は死にませんよ?」

一「え?」

夢喰「食べる夢がなくなればまた新たな宿主を探せばいいだけですから、そのあたりの心配は

ナツシーングです」

一「え、え、そんな簡単に宿る相手を変えられるんですか?」

夢喰「ハイ」

一「だったら早く次の宿主を探せばいいだけじゃないですか! 深刻な感じと言われるから

こっちはてつきり……」

夢喰「例えるなら! 今目の前で行きつけの定食屋が潰れる寸前です。確かにその店が潰れたところ

でこちらが死んだりはしませんが、なーんか後味が悪かつたりしません? 新しく馴染みの店
を探すのはおつくうだったりしません? 今の私の心境は正にそう言った感じなのです」

一「…なんか夢喰さんて、色々と現実離れしてるのに、言動が人間染み過ぎていて、

リアクションに困ります」

夢喰「事態の深刻さが呑み込めたようでは何よりです。センセイは自分の夢を守るため、そして私は
行きつけの定食屋を守るため、利害が一致した我々は正に運命共同体なのです!!」

一「……それで、僕に一体どうしろって言うんですか？」

夢喰「センセイ、あなた夢を叶える覚悟はお有りですか？」

一「え？」

夢喰「夢喰は単なる穀潰しではございません、頂いた夢の量に応じて宿主の夢を応援する力となる
ことが出来るのです。私はセンセイから長年夢を頂戴し続けております故、大抵のお望みに
はお答えできるかと思えます」

一「夢喰さんが僕の夢を叶えてくれるんですか？」

夢喰「ハイ、何せ我々は運命共同体ですから」

一「……………」

夢喰「あくまで自力で夢を叶えたい、それも立派な決意だとは思いますが、さすがそう語り潰れてい
った定食屋を私は数多く見て来ました。さあ、あなたはどうか？桜井一センセイ？」
一「僕は…僕は夢を叶えたいです。諦めたくない、勝ち取りたい！たとえどんな手を使っても！」
夢喰「エクセレント！！素晴らしいお答えです。わたくし夢喰は全力でああなたの夢を

サポート致します！」

一「それで、具体的にはどんな事を……………」

夢喰「ああ、別にこれと言ってどうこうはありません。今まで通り夢に向かって努力を
続けてください」

一「え？」

夢喰「夢喰は魔法使いではありません、明日いきなりあなたの夢を叶える事が出来るわけではないのです。しかし必ず『結果への道』を切り開いてみせます。これが夢喰との契約なのです」

一「契約……」

夢喰「改めて問いましょう。桜井一センセイ、夢を叶える覚悟はありますか？」

一「……………はい！」

夢喰「契約は完了いたしました。あなたの覚悟に敬意を表します」

画面がぼやけていく

一「なんだ……………？急に…意識が……………」

夢喰「それではセンセイ、これからガンバって下さいネ」

暗転

3、一の部屋

一「よおーし！新作ネーム完成だ！！」

光子「お疲れ様です先生、お茶でも飲まれますか？」

一「ありがとう光子ちゃん、でも遠慮しておくよ。これから編集部に行つて倉持さんにネームを見てもらうんだ。悪いけど留守番頼んだよ！」

光子「ああはい、お気をつけて」

一「行つて来ます！！」

一 O U T

心平「行つちまった…」

ハナ「なんか子供みたいな笑顔だったね、先生」

心平「まあ良いんじゃないやねえの？打ち切り食らつた直後なんか見てられないくらい落ち込んだわけだし」

ハナ「そうだね、今の心平クンと同じくらい暗い顔してたもんね」

心平「はあ？俺は別にそんな顔してねーよ」

ハナ「うっそだー！心平クンで考えてる事すぐに顔に出ちゃうタイプなんだよ。ねえみっちゃちゃん？」
光子「はい…私も実は心配してました」

心平「マジかよ……女ってパネエな」

ハナ「どーせまた歌のオーデイション落ちたとかそんな感じなんでしょ？話してみなつて」

心平「……うつせーな。ああそうだよ、『また』オーデイション落ちたせいでへこんでただよ

悪かったな」

ハナ「わっ、当たり前だったんだ…ゴメン」

心平「急にしろらしくなんなよ気持ち悪い……それよりハナ、お前こそ両親の事説得出来たのか？」

ハナ「ぜーんぜん。アタシが何度ダンスの専門学校行きたいって言っても、『そんなもの将来出て

も何の役にも立たないからちゃんど大学行け！』って怒鳴られちゃつてさ。あーあ、

アタシも心平君みたいに家出しちゃおうかな」

光子「ハナさん、それは…」

ハナ「なーんてウソ、もうちよつと頑張つて説得してみるよ。みんなに心配掛けたくないしね」

心平「まあ、なんかあったら相談しろよ。一応これでも先輩なんだからな？」

ハナ「ありがと心平くん！んで話を戻すけどさ、先生つてばなんで急に明るくなったんだろ？」

心平「そりやお前……アレに決まってるだろ」

ハナ「アレ……？」

心平「……いいか、彼女持ちの男がやる気を出すと云つたらだな……」

光子「ゴホン！心平さん、教育上宜しくない発言は控えてください」

心平「…サーセン」

葵「あ、皆来てたのね」

心平「葵さん、こんちわーっす」

ハナ「お邪魔してまーす」

葵「こんにちは二人共……あれ光子ちゃん、いちくんは？」

光子「先生ならつきつき新作のネームを完成させて、編集部に出かけていきました」

葵「え？ そうなの？ じゃあ今日帰り遅いの確定じゃない……せっかくの休日だから外食しようって

LINEしといたのに、また見てないなーいちくんめ」

心平「そういや先生、最近ずっと携帯OFFモードみたいだな」

ハナ「OFFモードって、仕事以外の通知全部切っちゃうアレの事だよ。そこまでやるかな普通」

光子「それだけ次の連載に懸けてるんですよ。あんなにやる気に満ちた先生私も初めて見ます」

ハナ「あ、そうだ葵さん、センチに一体何したの？」

葵「え？ どうしたの急に？」

心平「馬鹿！ ハナおまえ……」

ハナ「さつき心平くんが『彼女持ちの男がやる気を出すにはアレしかない』って言ってたんだ。

葵さんが何かしたから、先生急にやる気出したんでしょ？ ねえねえ教えてよ！」

葵「……光子ちゃん、そういう事かな？」

光子「はい、そういう事です」

心平「ちよお！みっちゃんまで……」

葵「心平君」

心平「は、はい！」

葵「次はないから。よく覚えておいてね？」

心平「肝に銘じます！！」

ハナ「……？ねえ、何の話？」

葵「ハナちゃん、悪いけどいちくんが急にやる気出した理由は私も知らないの、ごめんね」

ハナ「えーそうなの？つまんない」

心平「ま、まあ良いじゃねえか！先生が元気になったのは間違いないねえんだしさ！この話は

これでおしまい！な！？」

ハナ「んーまいつか。じゃあ葵さん、もう一個だけ聞いてもいい？」

葵「ええ、いいわよ」

ハナ「先生と葵さんで、いつ結婚するの？」

間

心平「おいこらバカハナ！なにさらっとデリケートな質問を……」

光子「その話題、私も興味あります！」

心平「えーどうしたのみっちゃんまで、目が血走ってるよーコワイヨー」

葵「あ、あはは。やだ急に何言い出してるのよ、私といちくんはまだ全然そんな感じじゃないって」
ハナ「でも8年も付き合ってるんでしょ？葵さんも結構いい歳なんだし、全く考えてない

わけじゃないよね？」

心平「お前は恐れという物を知らないのか」

葵「まあ……まったく考えないわけじゃないけど、でもいちくん基本的にずっと忙しいし、

私もいちくんの仕事の邪魔はしたくないし、だからそういう話中々切り出せなくてね……」

光子「葵さん……」

ハナ「そんな葵さんが可哀そうだよ！先生に『もっと彼女を大事にしろー！』って

アタシから言おうか？」

心平「ハナ、こういうのは部外者が口出しするもんじゃねーぞ」

ハナ「部外者じゃない！アタシは先生と葵さんの……あれ？アタシ達の関係ってなんなんだろう？

友達……とも違うし、でも部外者とか言われると寂しいし……あー上手い言葉が見つからない！」

葵「……あははは！確かに言われてみると不思議な関係だよね私達って」

ハナ「ねえ心平くん、アタシ達と先生達の関係ってなに！？」

心平「ええ！？ここで俺に振るのかよ！ええっと、その……」

葵「でも……確か心平君が一番最初だったんだよね、いちくんと出会ったの」

心平「え？ああまあ……2年位前かな、親の反対押し切ってミュージシャンになるって田舎から

飛び出してきて、たまたま住む事になったこのアパートに漫画家が住んでるって聞いてた

から、何とかサイン貰おうと玄関前で張り付いてたのがきっかけだったな……」

一「サイン！？いや僕はそんな大した人間じゃ…でも、ありがとうございます。凄く嬉しいです！」

心平「そしたらその人があの『1年ちよつとのヒーロー』の作者だつて知つてすげーテンション

上がつてさ！それで何とか仲良くなりたくて、この部屋に通い詰める様になつたんだ」

ハナ「アタシは、バイト先が同じだつた心平クンから先生の話を聞いて、なんか楽しそー！

つて思つて、先生の部屋に転がり込んだ第2号！」

一「心平君この子は？つて困るよ勝手に部屋に入っちゃ！ああ原稿に触らないでえー！！！」

光子「私は初めて書いて持ち込んだ漫画を編集部からひどく貶されてしまつて……泣きながら家に

帰る途中で先生に出会いました。自棄になつて原稿を捨てようとした私を先生が必死に

止めてくれて、グシヤグシヤになつた原稿を見ながらこう言つてくれたんです」

一「僕にはこのマンガ凄く魅力的に見えますよ、オカルトと言うジャンルへの愛を凄く感じます。

だから諦めないでください、僕があなたのファン第一号になりますから！」

光子「昔から引つ込み思案で、自分に自信のなかつた私を先生は励ましてくれたんです。

あの時は本当に嬉しかったなあ……」

葵「そんな光子ちゃんが、今ではいちくんのアシスタントだもんね。いちくんいつも言ってるよ、『光子ちゃんは絶対プロになれる子だ』ってね」

光子「葵さん…ありがとうございます」

心平「まあ、そんなこんなで気まぐれに先生の部屋に集まるようになった俺達だけど、中でもとりわけ奇妙なのが……」

太蔵 I N

太蔵「ういーつす、相変わらずこの部屋はカギとか掛けねえのな。でもそこがスキ！」

ハナ「でた、酒飲みギャンブルオヤジ」

太蔵「なんだガキンチョ、今日はまだ酒飲んでねーぞ。ギャンブルは今しがたしてきたけどな！」

心平「結果は？」

太蔵「バカ勝ち。今日はパチンコで、もうフィーバーが止まらんくて止まらんくて…」

光子「葵さんは知ってますか？太蔵さんと先生が知り合ったきっかけ」

葵「いちくんから聞いた話だと、家の前で酔いつぶれてた太蔵さんを介抱したら、なんか懐かれたんだって」

光子「ひどいはなしですね」

葵「そうね」

ハナ「あれ、太蔵さん何持ってるの？」

太蔵「ふふ喜べガキ共！今日の勝ち分で色々買い込んできたからな、今夜はパーティーだぞ！」
心平「マジかよおっさん、太っ腹ああ！！」

ハナ「イエーイ！ハナ、喜びのダンス踊っちゃいまーす！！」

太蔵「おお！良いぞガキンチョ踊れ踊れー！！」

葵「…まあ、悪い人ではないんだけどね」

光子「ですね」

葵「…はいみんな静かに！近所迷惑でしょ。だから静粛に、かつ速やかに、パーティーの準備を
始めましょう！」

全員「おーーう（はーーい）！！！！」

暗転

マンガ「ダブルガール」ネタ

カオル「私の名前はカオル、どこにでもいる普通の女子大生。しかしそれは昼の顔……」
マリアン「夜になると私はマリアンと名を変え、マッドサイエンティスト（怪盗）として

世の中をお騒がせしちゃうの♪」

ナレーター「2つの顔を持つ女が織り成す、日常&サイエンス&怪盗&バトル&アクション&
ラブ&コメディ『ダブルガール』！！ポロリもあるよ」

マンガネタ終了

絵・編集部

一「どうでしょうか！？新作の『ダブルガール』！とにかく色々な要素てんこもりで幅広い層をターゲットにしたんですが……」

倉持「桜井君」

一「はい！」

倉持「ボツ」

一「そんな……」

倉持「どう考えても詰め込み過ぎよ。日常&サイエンス&怪盗&バト……ダメ、全然頭に入ってこない。それに何？夜の顔の設定のマッドサイエンティスト（怪盗）って、無理矢理感が凄い。以上の理由からこの作品はボツです」

一「駄目か……なんだか新しい扉が開けたような気がしていたんですけど」

倉持「ねえ桜井君、そんなに新しい事にこだわる必要はないんじゃない？」

一「え？」

倉持「確かに作家と言うのは、常日頃から色々なものをインプットしそれらを作品に反映させるのが仕事よ。でも新しさに固執しすぎて自分の個性を見失ってしまったては本末転倒だわ」

一「僕の個性……っていったい何なんですかね？」

秋治「んなもん決まってるだろ、バトルマンガだよ！」

一「しゅ、秋治くん!？」

秋治「あ、お邪魔しますねハジメの担当さん、えーっと名前は確か……」

倉持「倉持美沙子です、市原秋治先生」

秋治「そうそう倉持さん、倉持さんと思いますよね?こいつはバトルマンガを描くべきだって」

一「ちよつと秋治くん、それはあくまで秋治くんの意見で……」

倉持「いえ、私もそう言おうと思ってたわ。桜井君、あなたはもう一度バトルマンガを描くべきよ」

一「ええ!？」

倉持「1作品目、『1年ちよつとのヒーロー』が打ち切られたのは男性キャラにばかり焦点を当てすぎたせいよ、でも2作品目の『ドキツとデストラクション』を書いた事で、女性キャラへの焦点の当て方をあなたは学んだわ。これまでの2作品で培った経験と技術で、改めて

バトルマンガに挑戦するのよ!！」

一「今の僕だから描けるバトルマンガ……」

倉持「王道バトル、そして魅力的なヒロイン、この二つを兼ね備えれば絶対にまた連載を

勝ち取れるわ。頑張りましょう、桜井君!！」

一「……はい、僕やってみます!もう一度バトルマンガを描いてみます!！」

秋治「よーし決まり!！」桜井一の次の連載はバトルマンガだ!！」

一「そんなに大声出したら周りに迷惑だよ、て言うかなんで秋治くんがそんなに喜ぶのさ」

秋治「なんでって、俺はずーっと読みたかったんだぜ？お前が描くバトルマンガ。色々迷走して時間は掛かったけど、それも無駄じゃなかったみたいだしな。マジ楽しみにしてるぜ」

一「秋治くん……」

倉持「そう言えば市原先生、あなた今日はどうして編集部に？」

秋治「おわー！そうだった！俺もこの後担当と打ち合わせがあるんだった！じゃあなハジメ、倉持さん、ダダダダーツシュ！！」

秋治OUT

倉持「おかしな人ね、流石は人気のギャグマンガ家ってところかしら」

一「中学の時からずっとあんな感じなんですよ、ホント幾つになっても変わらないな……」
倉持「さて、次の作品の方向性も決まった事だし、今日はもう解散にしましょう。」

お疲れさまでした」

一「はい、お疲れさまでした！！」

暗転

葵「いちくんと出会ったのは、大学のマンガサークルだった。当時やりたい事もなかった私が興味本位で入ったサークル、そこで誰よりも熱心にマンガを描いていたのがいちくんだった。普段は少し頼りないけれど、マンガを描いている時の真剣な表情とのギャップの有る彼に、私はいつしか恋をした。そして私達は付き合うようになり、大学を卒業して私は就職、いちくんはプロの漫画家になった。そうして時は流れ、私達は今……」

絵・一の部屋

一「はあ……つかれたー」

葵「おかえりいちくんー!」

一「うわ!? どうしたの葵ちゃん……って酔っぱらってる?」

葵「酔ってなんか無いっスよ……私は全然酔ってなどおりません!」

一「酔っぱらいのお手本だ……」

心平&ハナ「先生おかえりー……!」

一「心平君ハナちゃん、二人も酔ってるの? ていうかハナちゃんはまだ未成年でしょ!」

光子「大丈夫です先生、ハナさんは場酔いしているだけですから」

一「光子ちゃん……良かったまともな人が居て。光子ちゃんはあるまり飲んでないんだね」

光子「ハイ、ビールと酎ハイと梅酒と日本酒とウイスキーをストレートで飲んだくらいです」

一「……そう言えば光子ちゃんはそういう子でしたね」

光子「何か言いました？」

一「ナンデモアリマセン」

太蔵「ぐがあー！！！！ぐおおおー！！！！」

葵「もー太蔵さんうるさいー」

一「ああ太蔵さん、またお腹出して寝て…風邪ひきますよ！」

光子「ごめんなさい先生、片付けちゃんと手伝いますから」

一「いいよいいよ、今日はもう遅いしとりあえず解散にしよう？」

光子「わかりました…：太蔵さん起きて下さい、ほら寝るなら自分の部屋じゃないとダメですよー」

太蔵「おうおうおう、分かっているわーかっている」

心平「おーしハナ、また家まで送ってってやるから感謝しろー！」

ハナ「感謝するー！んじゃ先生、またねー」

心平・ハナ・光子・太蔵OUT

一「全くしようがない人達だな…：ほら葵ちゃんとりあえず座って、水飲む？」

葵「いらなーい、いちくんが傍に居ればそれでいいー」

一「分かったから頭こすりつけないで…ほれ、どうどう」

葵「ぶー、なんか対応が雑ー」

一「そんなことないって。それよりどうしたの？こんなになるまで飲むなんて珍しいね」

葵 「太蔵さんがパーティーやるぞーって言いだして、最初はすごく楽しかったんだけど、

だんだん覚えてなくて、気が付いたらいちくんが帰って来てたのー」

一 「なるほどね……でもダメだよ？葵ちゃんあんまりお酒強くないんだから、飲みすぎ注意」

葵 「お説教は聞きたくありませんー」

一 「子供か……あ、そうだと葵ちゃん。今日新作の原稿を持って倉持さんの所に行って来たんだ」

葵 「ふーん、どうだったの？」

一 「新作自体はダメだったんだけど、連載への希望は見えただ。次の作品こそは

バッチリ決められると思う」

葵 「そっかー良かったねいちくんー、えらいえらい」

一 「ありがとう。それで、もし次の連載が決まったら……その時は、葵ちゃんのご両親に

挨拶に行こうと思うんだ」

葵 「……え？」

一 「その、もちろんまだ連載も決まったわけじゃないし、決まったからってすぐにどうこうって

訳じゃないんだけどさ、何て言うか……葵ちゃんとの事真剣に考えてるんだって、伝えたくて……」

葵 「いちくん……」

一 「ごめんね、ずっと不安にさせてたよね？分かってはいたんだけど、どうしたら良いのか中々

思いつかなくて……でも、ちゃんと覚悟決めたから。自分の夢の事も、葵ちゃんの事も」

葵 「……っ……」

一 「葵ちゃん……もしかして泣いてるの？」

葵「泣いてない、いちくんのバカ。酔ってる女にそうやって優しい言葉を掛けるなんてズルい、

サイテー」

一「ええ！？いや、僕そんなつもりじゃ…」

葵「でも、ありがとう。すっごく嬉しい、いちくんがちゃんと私の事考えてくれたの、伝わったよ」

一「葵ちゃん……」

葵「よーし！今から色々お祝いだー！！！！飲んで飲んで飲みまくるぞー！！！！」

一「ウソでしょ！？葵ちゃんまだ飲む気なの！？」

葵「何を他人事のように言ってるんだい、お前も飲むんだよー！！」

一「うわー！やめて！一升瓶をそんな…あああああー！！！！！！」

暗転

絵・夢の世界

夢喰「オハヨウゴザイマス…」

一「うわ！？何ですか耳元で！？」

夢喰「いえ、前回はテンションMAXでお出迎えしたので、今回は違うバージョンをと思ひまして」

一「そんな所にバリエーション求めてないですよ！」

夢喰「んふふ、しかしセンセイは本当に順応性の高い方ですね、2回目にしてもう私の事を当然のように入れている。これも作家と言う業種のなせる業なのでしょいかね」

一「それより、今日は何の用ですか？」

夢喰「何の用って…呼び出したのはあなたでしよう？」

一「…え？」

夢喰「夢喰は本来人間に干渉しない生き物です。最初の出会いにはあなたが夢を失いたくないと強く願ったからであり、だからこそ私はセンセイの夢を食べ尽さずに済みました。

そして今回は…一体どういったご用件で？」

一「そつか…：…僕、夢喰さんにお礼が言いたかったんです」

夢喰「お礼…？」

一「夢喰さんと契約してから、色々な事が良い方向に向き始めました。きっと僕だけの力じゃこんな風にはなってなかった。だから感謝の気持ちを伝えたいってそう思ったんです」

夢喰「それは違いますよセンセイ、夢喰はあくまで夢への道を切り開く存在、開かれた道を歩むのはあくまでその人の意志と力が有ってこそ。自分が前進したと感ずるのなら、それはつまり自分の努力のお陰なのですよ」

一「夢喰さん…：…」

夢喰「しかし油断は禁物です！あなたはまだ夢半ば、ここで気を抜いてはなりませんよ」

一「分かってます。次の連載、必ず良い作品にしてみせます！！」

夢喰「よろしい、ではここでD P Pを使ってこれまでの物語をおさらいしてみましよう」

—「え？どうしてそんなことを……」

夢喰「物語も半ばに差し掛かってきましたからね、一度情報を整理した方が良くと思います……」

ねえ？（客席に向けて）

—「いま誰に向かってしゃべってます？」

夢喰「DPP起動！！」

絵・DPP2

夢喰「人物相関図はこんな感じでしょうか……中々面白い人間模様です。そして恋人の葵さん、

ゆうべはおたのしみでしたね」

—「なっ……まさか見てたんじゃ！？」

夢喰「そんな悪趣味な事はしませんよ、ちゃんところ、手でシャッターを作っところ……」

—「むぐらいさん？」

夢喰「じよ、ジョークですって！そんなに怖い顔しないでください……」

—「まったく……つまらない冗談につきあうつもりはありませんよ」

夢喰「いえいえ、大変重要な事です。ここにはあなたが夢を叶えるためのピースがたくさん

散りばめられているのですから」

—「え？」

夢喰 「忘れないください、あなたは夢を叶えると言いました、どんな手を使ってでもと。

あの時の言葉に嘘偽りはありませんね？」

一 「は、はい…もちろんです！」

夢喰 「では、引き続き頑張ってください。桜井一センセイ」

画面がぼやけていく

一 「うつ……また意識が……」

夢喰 「夢を叶える時は近いですよ、楽しみですねえ……」

暗転

4. 一の部屋

一「はあ……連載会議まだ終わらないのかな……この瞬間だけは何度経験しても緊張するよお……」

太蔵 I N

太蔵「おーつす、相変わらずカギとか掛けねえんだなこの部屋は。でもそこがスキ！」

一「太蔵さんまた酔っぱらって……ないみたいですね」

太蔵「なんだなんだ、この間のハナと言いい人を年中酔っぱらってるおじさん扱いしやがって。

まあ事実だけどな！」

一「どうしたんですか？僕今日は連載会議の結果待ちなんであまり悪ふざけには付き合えませんが」

太蔵「そう邪険にするなって、今日は結構真面目な話をしに来たんだ」

一「真面目な話……？太蔵さんが！？」

太蔵「おいどんだけ衝撃を受けてんだ。おじさん流石に傷つくぞ」

一「いやごめんなさい、思いもよらない展開について……」

太蔵「まあ日頃の行いを考えればしょうがねえけどよ……でも、俺も昔はこんなじゃなかったんだ」

一「え？」

太蔵「俺よお……昔料理人をやってたんだよ、地元の商店街のちっちゃい定食屋だ。大して繁盛してはいなかったけど、近所の常連客からは割と気に入られている、そんな店だった」

一「……初めて聞きました。て言うか太蔵さんがギャンブル以外で自分の事話すの、

初めてじゃないですか？」

太蔵「そうだったか？まあんなこた良いけどよ……当時の俺は店の仲間とそして結婚を約束した女と共に暮らしながら一つの夢を持っていた。自分の店をもっともつとデカくして、俺を支えてくれていた奴らに恩返しするって夢を……でもある日、その夢はフツと消えてなくなっちゃった」

一「どうしてですか？なんで急にそんな……」

太蔵「俺にも分からねえ。でも心に大きな穴が開いたような感じがして、それから俺は料理人の仕事に全く身が入らなくなっちゃった。店は開けない、食材も仕入れない、包丁すらも握らなくなつて……やがて愛想を尽かした仲間も恋人も、俺の傍から離れていった」

一「な、何か病気になつたんじゃないですか？そうでないとそんな……」

太蔵「勿論病院にも行つたさ。でも何カ所回つても『異常なし』の診断しかされなかつた。

絶望した俺は地元を離れ、とにかく色々な場所へ行つた。そうやって自由気ままに生きて、酒に溺れギャンブルに狂えばあの日々の事を忘れられると思つたんだ。でも無理だつた。

心にぽっかりと空いた穴を埋められないまま、もう10年俺は惰性の人生を過ごしている」

一「太蔵さん……」

太蔵「けどな、不思議と先生達といると少しだけ心の穴が埋まるような感じがしたんだ。

ここに居るみんなはそれぞれが夢を持って頑張っている、俺が失つてしまつた『あの場所』に凄く似ているんだ。だからここに居るとこんな俺でもまた夢を持てるようになるんじゃないかって、そんな気にさせられる」

一「そんな風に思ってくれていたんですね。僕全然知らなくて……」

太蔵「おいおい止めてくれよそんな顔、俺が勝手に黙ってて勝手に話しただけなんだからよ」

一「でも、どうしても急に話してくれる気になったんですか？」

太蔵「それは……なんか最近の先生が、昔の俺に似ている気がしてよ……」

一「え？」

太蔵「いやもちろん、ただの気のせいだと思うんだけどよ。でもほんのちよつとでも可能性が

あるんなら、先生には俺みたいになつてほしくないってそう思ったんだ」

一「……心配してくれてありがとうございます。けど僕は大丈夫ですよ。葵ちゃんが居て、心平君や

ハナちゃんや光子ちゃんが居て、そして太蔵さんが居てくれる。だから僕は絶対に大丈夫です」

太蔵「そつか……悪かったな急に変わった話して、それと他の奴らにはこの話は内緒だぞ？」

一「ええいいじゃないですか、きつとみんな太蔵さんを見る目変わりますよ？」

太蔵「別にそんなの望んじやいねえよ、大森太蔵は、飲んだくれのチートギャンブルおじさん。

今はまだそれでいいんだ」

一「……そうですか」

チャイムSE

太蔵「お、噂をすれば『みんな』が来たんじやねえのか？」

一「ええ？まだ連載会議の結果出てないのに……」

一「わわ、掛かってきた!？」

太蔵「出ろよ先生、玄関の方は俺が行くからよ」

一「すみません、よろしく願います!」

葵、心平、ハナ、光子、倉持IN

一「も、もしもし!」

倉持「お疲れ様です桜井先生」

一「お疲れ様です!あのっ……」

倉持「良い知らせと悪い知らせが1つずつあります。まずは……良い方の話をしましょう」

一「……はい」

倉持「…おめでとう、あなたの新作『ドリームイーター』の連載が決定したわ」

一「…本当ですか!?連載、連載決まったんですか!?」

倉持「ええ、本当よ」

一「いやったあああ——!!!!!!」

葵達、一のリアクションを見て共に喜ぶ

倉持 「桜井君！気持ちには分かるけど落ち着いて……もう一つ大事な話があるの」

一 「ああすみません！悪い知らせも有るって言ってましたよね、なんででしょうか？」

倉持 「それが……実はね、市原秋治先生が事故に遭われたの」

一 「え……？」

倉持 「とある建設現場を通りかかった時に資材の落下事故に巻き込まれて、幸い命に別状は無い

一 「つまり……どういうことですか？」

倉持 「市原秋治は……もうマンガを描く事は出来無いわ」

一、携帯を持つ手が力無く落ちる

葵 「いちくん……どうしたの？」

一 「あおいちゃん……ぼく……ゆめをかなえたよ？」

暗転

43

絵・回想シーン

秋治「なあハジメ、お前将来の夢ってあるか？」

—「どうしたの急に？」

秋治「いや、俺らもう15歳じゃん？受験とかその先の事とか色々考えねーとやべーのかなって」
—「そうだね、受験は…正直入れれば何処でも良いんだけど、将来やりたい事はあるよ」

秋治「へー、なんだよ？」

—「……漫画家」

秋治「漫画家ってあのマンガ書くやつ？マジで！？」

—「ほら僕って勉強も運動も苦手で……唯一の取り柄と言ったら絵を描く事くらいだから。

それに少年漫画大好きだし！」

秋治「ふくん」

—「…って、流石に安易すぎるよね。僕より絵が上手い人なんて世の中幾らでも居るだろうし……
やっぱ今の無し、忘れて！」

秋治「なんで？イイじゃん漫画家、カッキーじゃん！」

—「そ、そうかな……」

秋治「ハジメなら絶対なれるよ。けどそうか漫画家か……よし！」

—「秋治くん？」

秋治「決めた！俺も漫画家になる！！」

一「ええ？秋治くんも！？」

秋治「俺もけっこう好きだしなマンガ、それに…ハジメと一緒に何やったって楽しいだろうしき」

一「そんな簡単に…でも、秋治くんらしいや」

秋治「よし！今日から二人でサイコーに面白い漫画家目指そうぜ！！」

一「うん！！！」

一「あれから僕達は漫画家と言う夢に向かって走り続けた。秋治くんはいつも僕の前を走っていて、僕は置いていかれないようにするのに必死だった。途中何度も挫折しそうな僕を秋治くんはいつも励ましてくれた。秋治くんが居たから僕は夢を諦めずにいられたんだ。それなのに……」

秋治「ごめんなハジメ……俺、もうマンガ描けなくなっちゃった」

秋治 O U T

一「秋治くん…待ってよ秋治くん！！！」

夢喰 「『ドリームイーター』主人公が自分の夢を悪魔に捧げる事で力を手に入れ、大切な物を守るために悪の組織と戦うお話……いやまさか、私の事を題材にマンガを描いて頂けるなんて光栄の極みです」

一 「……どうしてですか？」

夢喰 「ん？せつかく夢が叶ったというのに浮かない顔ですね、もつと笑いましょよろ

ほらスマイル☆」

一 「どうして、なんで秋治くんがあんな目に合わないといけないんですか！？」

夢喰 「市原秋治さんは事故に遭われたのでしよう？何故私に食って掛かるんですか」

一 「秋治くんがマンガを描けなくなって、雑誌の連載に穴が開いてしまった。今回の僕の連載はその穴埋めだって倉持さんは言っていた……こんなの偶然と思えるわけがないでしょう！？」

夢喰 「私のせいで市原秋治さんが事故に遭ったのだと、そう言いたいのですか？」

一 「それ以外何があるっていうんですか……！」

夢喰 「もしそうだとしたら、一番の元凶はあなたですよセンセイ？」

一 「何を言ってる……！」

夢喰 「あなたは私との契約の際に言いました。どんな手を使っても夢を叶えたいと。

私はその言葉通りの結果に導いたに過ぎません」

一 「だからって、どうして秋治くんを……！」

夢喰「センセイ、あなたもしかして理解していなかったのですか？」

—「え？」

夢喰「夢の座席という物は、座れる数が限られています。誰かがその座に就くと言う事は誰かがその座から転げ落ちる事を意味します。あなたが夢を叶えた結果市原秋治が夢に敗れた。それだけの事です」

—「そんな……僕のせい？僕が夢を叶えようとしたせいで……」

夢喰「親友を踏み台にしてまで夢を勝ち取るなんて……まさに執念の勝利と言えますねえ
おめでとうございます！！」

—「違う……僕はそんなつもりじゃ……」

夢喰「お祝いついでにもう一つ真実を教えて差し上げましょう。夢喰とは何なのかをね」

—「……え？」

夢喰「夢喰とは、夢に敗れた人間達の怨念の集合体なのです。」

—「怨念……」

夢喰「叶わなかった夢、果たされなかった願い。それらにまつわる妬み嫉みが長い年月と共に蓄積しやがて一匹の怪物を生み出した。それが私、夢喰なのです」

—「怪物……そんな奴を僕は……」

夢喰「怪物はとにかく空腹でした。それを満たすには人の夢を喰らう他は有りませんでした。結果、怪物は多くの人間の夢を喰らい尽くす事となったのです。あの男、大森太蔵もその内の一人でした」
—「え……？」

夢喰「彼は夢の半ばで力尽き、私に夢を食べ尽されてしまったのです。最初に話したでしょう？」

「そうなれば、惰性の人生を過ごすことになる」と

一「太蔵さんのあの話もあんたが……なんでなんだ、一体何の目的で僕達を!？」

夢喰「別に誰でも良かったんです。私の空腹を満たしてくれるのであれば誰でもね」

一「誰でも良かっただって……?ふざけるな!！」

夢喰「ふざけてなどおりません。人の夢を喰らい夢で人を喰らう、ただそれだけが

私の存在意義なのですから」

一「だ、誰でも良いなら僕じゃなくたっていいんだろ!?なら今すぐ出て行けよ!誰か他の……」

夢喰「そうやってまた、誰かを犠牲にして自分だけ幸せになるおつもりですか？」

一「犠牲……違う……僕はそんなつもりじゃ……」

夢喰「忘れないで下さいねセンセイ、私達は共犯です。市原秋治を犠牲にして手に入れたこの夢を

糧にして、これからも生きていくのですから」

一「……はは……そっか……僕は……」

画面がゆがんでいく

夢喰「あなたはもう立ち止まる事は許されない……良かったですね、これで一生夢を

見続けられますよ」

暗転

5、一の部屋

心平 「先生の連載が決まってから半年が経った。『ドリームイーター』は世間の評判も良く、週刊少年バルカンの人気漫画となった。その話自体は喜ばしい事だと思う。だけど……あの日以来、俺達は先生の笑顔を見ていない」

ハナ 「心平クン、心平クンってば！」

心平 「え？なに？」

ハナ 「何じゃないよ、『先生を爆笑させよう大作戦』言い出しっぺは心平クンなんだからちゃんとやってよね！」

心平 「わ、わりいわりい！とりあえずみんなが持ち寄った作戦を確認するんだったな」

光子 「それじゃあ発表しますね……ユーチューブのおもしろ動画を見せまくる、2・3日休みを取って気分転換してもらおう、くすぐる、葵さんに色仕掛けをしてもらおう。以上です」

太蔵 「一応匿名ってことで書いたけど……あんまり意味なかったな」

光子 「葵さんがこの場に居なくて良かったですね？心平さん」

心平 「ええ！？なんで俺って決めつけるんだよ！」

ハナ 「うくん、どれもイマイチぱっとしないな……どうすれば先生笑ってくれるんだろう」

心平 「悪い俺だ……ちよつと出てくるわ」

心平 O U T

ハナ 「誰だろ？」

太蔵 「さあ、彼女じゃねーのか」

光子 「え、心平さんで彼女いたんですか!？」

太蔵 「知らんけど、あいつだってもう二十歳だろ?彼女の一人や二人くらい……」

ハナ 「し、心平クンに限ってそれは無いっしょ!頭良くないしデリカシーないし、それに ミュージシャン目指してるフリーターなんて誰も相手にするわけないじゃん!？」

光子 「ハナさん、もしかして……」

ハナ 「え?いや違うよ!?やだなーみっちちゃんてばアハハハ……」

心平 I N

心平 「悪いな……途中で抜けちまって」

光子 「いえ、大丈夫ですけど……」

ハナ 「もう心平クンってば、誰からの電話だったの?」

心平 「別に……」

ハナ「別につてことはないでしょ、ほらほら教えてよ」

心平「しつけない誰でも良いだろ!!!」

ハナ「……ごめんなさい」

太蔵「おい心平、何も怒鳴る事ねえだろう」

心平「……わりいハナ、いきなりでけえ声出して」

ハナ「ううん謝らないでよ、アタシがしつこかったのがいけないんだし」

心平「そうじゃねえんだ……そうじゃなくて……」

光子「心平さん……何かあったんですか？」

心平「……何日か前に、田舎の親父が病気で倒れたんだ。結構容体が悪いらしくて……それで、

お袋が泣きながら『帰ってきてくれ』って」

ハナ「やばいじゃんそれ！なんで？どうして早く帰ってあげないの!？」

心平「俺は……！自分の夢を叶える為に家族や地元のダチ全部捨てて来たんだ。親父には

勘当だとも言われた。なのに今更どの面下げて戻って言うんだよ!」

ハナ「でもお父さん危ないんでしょ!？だったら変な意地張ってる場合じゃないじゃん!」

太蔵「よせハナ、心平の気持ちも考えてやれ」

ハナ「気持ちつて何!？太蔵さんには分かるの?」

太蔵「何となくだが察しは付く……心平、お前の実家は確か八百屋だったな。親父さんが

倒れたとあつちや店をどうするかつて話にも当然なつて来る。今お前が地元に戻れば

『店を継げ』と誰もが言うだろう。そうなればお前は……」

ハナ「……あ」

光子「ミュージシャンの夢を諦めなきゃならないって事ですか？」

太蔵「極端な話だが、そうなる可能性はある。だから心平はこんなに悩んでいるんだ」

心平「俺……どうすりゃいいのかな？夢と家族、一体どっちを取ればいいんだ」

ハナ「心平クン……」

— I N

—「ただいま……」

光子「先生おかえりなさい。編集部との打合せどうでした？」

—「ああ順調に終わったよ。読者アンケートも単行本の売り上げも良くて、アニメ化の話も持ち上がってるって倉持さんが言ってた」

光子「アニメ化！？凄いやないですか、まだ連載して半年なのに……」

—「いや……まだまだだよ、僕はもつと高みに上らないと」

光子「先生……？」

—「ああ、みんな来てたんだ。悪いけどこれから仕事するから今日はもう帰ってよ」

ハナ「先生、あのね……」

心平「おい、止めるよハナ！」

ハナ「大事な話じゃん！先生ならきつと良い方法考えてくれるよ！」

一「…僕の話聞いてた？今日はもう……」

ハナ「先生、少しだけ時間を頂戴！お願いだから心平クンの話を聞いてあげて」

一「え？」

太蔵「先生、俺からも頼む」

一「…分かったよ、少しだけだからね。でなに？心平君」

心平「俺は…先生に全てを話した。この時俺は心のどこかで、先生ならなんか良いアイデアを

考えてくれるんじゃないかと思っていた。だけど……」

一「そつか、じゃあ帰れば？田舎に」

心平「……え？」

一「別に田舎でも音楽はやれるだろ？家業を継いで音楽は趣味で続ける。これが一番妥当な

答えだと思うよ」

ハナ「そんな簡単に…先生だつて知ってるでしょ？心平クンは世界一のミュージシャンになりた……」

一「大事なものを切り捨てる覚悟も無いような奴に、夢を見る資格なんてないんだよ」

ハナ「何言ってるの…？どうしてそんな酷い事言うのセンセイ！！」

一「ハナちゃんさ、随分前から『親を説得する』って言いながら、何も進展せずここまで来ちゃつたよね？だからと言って家を飛び出す勇氣も無い…資格の無さで言えば君は心平君以下だ」

ハナ「え……あ、アタシ……」

光子「先生、もうその辺で……」

一「光子ちゃん、君もいつまで僕のアシスタントで居るつもりなの？自分の好きなオカルトをマンガにしたい、そんな事言ってからずいぶん時間が経ったけど、君もあの頃から何も変わってないよね？」

光子「私は……ただ先生の力になりたくて……」

一「覚悟も無い行動もしない、そんな半端な連中に付き合ってる時間僕には無いんだよ。

分かったらさっさと帰って……」

太蔵「っ！！！」

太蔵、一を殴り飛ばす！！

光子「先生！！！」

ハナ「ちよつと太蔵さん！？」

太蔵「お前！！今自分が何を言ってるか分かってんのか？ああ！？」

一「……口で敵わなければ暴力ですか？いい大人が情けない」

太蔵「あの時！俺みたいになつて欲しくないって言ったはずだぞ！！それなのにどうして……」

一「大丈夫ですよ。僕は……あなたとは違いますから」

太蔵「先生……あんた、まさか……？」

心平「ああーやめやめやめ！！……もういいよみんな」

ハナ「心平クン？」

心平「ごめんな先生、俺みたいなハンパもんが迷惑掛けちまって……俺田舎に帰るよ、ミュージシャンの夢も諦める。全部先生の言う通りにするから」

ハナ「ダメだよ心平クン……絶対ダメだよ！！アタシ馬鹿だけど一生懸命考えるよ、だから……」

心平「ありがとなハナ。でももういいんだ」

ハナ「心平クン……」

心平「先生、今まで本当にありがとうございました。さようなら」

ハナ「待ってよ心平クン！！」

心平・ハナ O U T

光子「私……一体どうすれば……」

太蔵「自分で考えるんだ。ただ、もうここに俺たちの居場所はない。それが現実だ」

光子「そんな……」

太蔵「じゃあな先生、風邪引くなよ」

太蔵 O U T、光子少し遅れて O U T

暗転

葵「そんな事件が起きているとも知らず、その日の夜私はある人を連れていちくんの家へと向かっていた」

葵「いちくん、どうしたのその顔!？」

一「何でもないよ、ただ転んだだけ」

葵「転んだだけって、そんなわけ…」

一「もういいから。それより今日は何？僕忙しんだけど」

葵「あ…その、いちくんに会わせたい人が居て連れてきたの」

一「会わせたい人？」

秋治 I N

秋治「よっ、久しぶりだなハジメ」

一「…秋治くん」

葵「ごめんね勝手な事して、でもいちくんずっと携帯OFFモードにしてたし…あの時からのいちくんを見てるの辛くて…だから私、秋治くん…」

秋治「なんだよ、ハジメも葵も暗い顔しちゃってさ！大学のマンガサークルの同期が、こうして久しぶりに揃ったんだぜ？もっと明るい顔しろって!!」

葵「確かに：3人で会うのなんて何年ぶりだろうね？いちくんも秋治くんも、基本ずっと忙しいから飲みに行こうなんて感じにもならなかったし」

秋治「けどまあ、俺としては未だに二人が付き合ってくれて嬉しいわけよ！あ、結婚式には呼んでくれよ？絶対参加するからな！」

葵「もう、秋治くんてば……」

一「秋治くん……右腕の調子はどう？」

秋治「お、早くもその話しちゃうか？それがもう絶好調！最初は医者に『二度と動かせないかもしれない』と言われてたんだけどよ、ほれこの通り……」

秋治、マンガに見立てた台本を震える右手でめくってみせる

秋治「こうやって……マンガのページをめくるくらいなら出来るようになったんだ。すげえだろ！？」

葵「お医者さんもビックリしているそうよ、想像を遥かに超える回復力だって」

秋治「やっぱり俺ってばマンガの神に愛されてんのかなー？この調子ならそのうち元通りに……」
一「そんな訳ないだろ、強がるのは止めるよ」

葵「ちよつといちくん、そんな言い方……」

一「ねえ秋治くん、どうしてそんな風に笑っていられるの？あんな理不尽な事が有って突然夢を奪われたって言うのに……なのに何でそんなに平気で笑っていられるんだよ！？」

秋治 「平気じゃねえよ……いきなり目の前が真っ暗なつて、気が付いたら右腕が

動かなくなつて、最初は絶望しかなかった……けど、それでも俺は諦めるわけには
いかなかった……ハジメ、お前が居たからだ」

一 「……え？」

秋治 「俺さ、昔っから辛い事があるとお前のマンガ読んで元氣貰つてたんだ。ダチのお前が
頑張つてるから俺ももう一踏ん張りしなきゃつてさ……今回だつてそうだ。

『ドリームイーター』……やつぱ面白えな、ハジメの描くマンガはさ」

一 「そんな……秋治くんも僕の事を……」

秋治 「いつか絶対、俺はまたマンガを描く。右手が駄目なら左手を使つても描いてやる！
だからもう少し待つてくれよ、俺は……」

一 「無理だよ」

葵 「いちくん？」

一 「マンガがそんなに甘いもんじゃないのは秋治くんが一番分かつてるだろ！？なのに

みつともなくあがいちやつてさあ……いい加減認めるよ、秋治くんは夢に敗れたんだよ！！！」
秋治 「ハジメ……どうしたんだお前？」

一 「どうしてみんな夢なんか見るんだよ！……辛い事や苦しい事ばつかで、例え叶つたとしても
幸せとは限らないのに！……大嫌いだ……夢も……それにすぎる奴らも……みんな……」

秋治 「……そっか、俺がこんな風になつちまつたせいでハジメも苦しんでたんだな……」

お前優しい奴だもんな」

一「違う……僕はそんなんじゃない」

秋治「軽はずみに会いに来て悪かった、これで最後にするから安心しろよ……そういうこと

だから葵、俺帰るわ」

葵「秋治くん……」

秋治「ハジメの事、頼んだぞ？んじやな！」

秋治OUT

葵「いちくん……ねえ何があったの？辛いのは分かるけど、やっぱり今のいちくんおかしいよ！？」

一「……………」

葵「お願いいちくん話してよ？ねえ！？」

一「うるさいなあ…葵ちゃんには関係ないだろ」

葵「私いちくんの彼女なんだよ？関係無いわけじゃない！！」

一「…じゃあ、別れよう」

葵「……え？」

一「ほら、これで関係なくなっただろ？もう僕の事は放っておいてくれ」

葵「何言ってるの…？ねえいちくん」

一「……………」

葵「ウソつき……私の事ちゃんと考えるって言ってくれたのに…いちくんのウソつき！！！」

葵OUT

—「あー……マンガ描かなきゃ」

暗転

倉持 「それから3か月後、『ドリームイーター』の打ち切りが決まった。桜井先生は派遣されるアシスタントと悉く衝突を繰り返し、やがて彼は一人でマンガを描くようになった。しかし、週刊漫画の連載はそんなに甘い物ではない。『ドリームイーター』はそのクオリティをどんどん落とし、更には締め切りも守れなくなり休載が続いた結果、一時はアニメ化の話も上がっていた作品にも関わらず、連載1年ともたず打ち切りの決断が下されたのだった」

絵・カフェ

倉持 「ごめんなさいね、休みの日に急に呼び出したりして」

葵 「いえ、倉持さん：ですよね？何度かいちくん……ハジメさんの家で」

倉持 「ええ、昔名刺を交換しておいて良かったわ。葵さん、て呼んでいいかしら？」

葵 「は、はい……」

倉持 「今週号のバルカンで、『ドリームイーター』が打ち切りになったわ。しかも今回は多方面への信頼を失った結果の打ち切り。正直、次が有るかどうかわからない状況よ」

葵 「……そうですか」

倉持 「ねえ、一体桜井君に何が有ったの？恋人のあなたなら何か知っているんじゃない？」

葵 「……分かりません。それに、私はもう恋人じゃありませんから」

倉持「え？」

葵「フラれたんです私、3か月前に……8年も付き合ってたのに、終わる時は案外一瞬でした」

倉持「そうだったの……けど、まだ好きなんでしょう？桜井君の事」

葵「……え？」

倉持「分かるわよ、同じ女ですもの」

葵「……私、ずっと怖かったんです。いちくんは私よりも夢の方が大切なんじゃないかって。

比べるような事じゃないって頭では分かっても、どうしても不安で……」

倉持「……そう」

葵「私は周りの人達みたいに夢って言えるものが何もなく……そんな私に夢を追いかける
いちくんの隣に居る資格は無いのかなって、ずっと思っていたんです。その考えがより

強くなったのが……秋治くんのお見舞いに行った時でした」

倉持「市原先生の？」

葵「はい……私は大学時代に見ていた、いつも明るくて笑顔な秋治くんしか知らなかったから、

あの時は驚きました」

絵・病室

秋治「くそ……なんで……なんで動かねえんだよチクショウ！！！」

葵「病院のリハビリ室で、動かない右腕と必死に戦う秋治くんは今までに見た事のない顔をしていました……別れ際のいちくんの顔もそうだった、夢を本気で追いかけている人はやっぱり別世界の人なんだって、そう感じてしまったんです」

倉持「なるほど……凡人ゆえの劣等感、分からなくも無い話ね。でもね葵さん、あなた一つ勘違いしているわ」

葵「え？」

倉持「夢を追いかけている人間は特別でも何でも無い……寧ろ普通に生きるよりも、遥かに多くの人達に支えられてやつとの事で生きていられるの。だから劣等感なんか感じる必要はないわ。あの人達も私達も、所詮同じ人間よ」

葵「……そうでしょうか？私にはそんな風に思えません」

倉持「私もね、昔漫画家を目指していたの。でも才能も根性も無かったから、あっさりと編集の道に転職したわ。そのせいで最初は酷い劣等感を抱えながら仕事をして……でも、作家と二人三脚で仕事を続けていく内に気付いたの、夢を追いかける人とそれを支える人との間に上も下も無いんだって。これは経験に基づいた実話よ、信用してくれて構わないわ」

葵「……ありがとうございます、慰めていただいて」

倉持「単なるおぼさんの小言よ、気にしないで」

葵「そんな、おぼさんだなんて……」

倉持「私、幾つに見える？」

葵「え……さあ？」

倉持「42よ」

葵「あつ……」

間

倉持「さあ、おばさんから若者に向けてもう一つだけアドバイスをあげるわ。心して聞きなさい」

葵「はい、すみません、はい、聞きます」

倉持「夢を見るのも誰かの隣に居るのも、才能とか資格とかそんなもの重要じゃないわ。

結局は自分がどうしたいのか、それが一番大事なのよ」

葵「私がどうしたいのか……」

倉持「自分の気持ちに素直になりなさい、葵さん」

葵「……私、いちくんの所に行ってきます！倉持さん、ありがとうございます！！」

葵OUT

倉持「良いわねえ若いって……あー私も恋したいわー」

暗転

絵・一の部屋（暗闇）

葵 「いちくん……居ないの……？電気、付けるね……？」

明転、絵・一の部屋、一が机に倒れ伏している

葵 「……いちくん！？どうしたのしつかりして……いちくん！いちくん！！！」

一 「………あおいちゃん？どうして……？」

葵 「今はそんなの良いよ！こんなにやつれて……熱も酷い……どうしよう……！」

一 「あ……マンガ、描かなきゃ……また倉持さんに怒られちゃう……！」

葵 「こんな時に何言ってるの！？それにいちくんのマンガは……もう打ち切られたじゃない」

一 「ああ……そっか……僕はまた……本当に駄目だな僕は……次こそは頑張らないと」

葵 「分かったから今は休んで、マンガはまた元気になったら描けばいいんだから、ね？」

一 「離してよ……！」

葵 「お願いだから言う事聞いて、じゃないといちくん、死んじゃうよ！」

一 「いいんだよ！！僕なんかどうなったって……！！！」

葵 「………いちくん」

一「全部……全部僕がいけなかったんだ。大した才能も無い癖に諦める勇氣も無くて……それでもマンガが好きだったから、なんとしても夢を掴みたくて……そのせいで、秋治くんから夢を奪った……みんなの事を傷つけた……葵ちゃんの事も裏切った。もう僕は、夢と共に朽ちていくしかないんだ……」

葵「そんなことない!!」

一「え……?」

葵「私はいちくんに何が有ったか全部はちゃんと知らない、きっと私の知らないところでいっぱい悩んで苦しんだんだと思う。でもねいちくん、誰もいちくんがこんな風になるのなんて望んでないんだよ?」

一「ウソだ……みんな僕の事を恨んでるに決まってる、あんなに沢山酷い事を言った僕の事なんて……」

葵「少なくとも私は!どんなに傷付けられても……いちくんの事が好きだよ」

一「葵ちゃん……」

葵「私だつてずっと悩んでた……いちくと一緒に居ない方がお互い幸せなのかもしれないってそう思おうとした!でも……やっぱりそんな風には思えなかった。私は……夢に向かって一生懸命で、優しいいちくんが大好きだから」

一「そんなの……本当は僕だつて……」

葵「本当は……なに?」

一「僕だつて……葵ちゃんに隣に居て欲しかった!みんなと一緒にここで笑っていたかった!……でも怖かったんだ。僕といるとまた秋治くんみたいな事になっちゃうんじゃないかって……だから僕は……」

葵「そっか…そうだったんだ…やっど話してくれたね。いちくんの本当の気持ち」

一「ごめん…みんな…ごめんなさい…」

葵「大丈夫だよいちくん、みんな…いちくんの事許してくれてるよ？」

一「…どうして、葵ちゃんに分かるの？」

葵「携帯、ずっとOFFモードのままでしょ？ちゃんと見てみて…そこに答えが有るから」

一「……………」

絵・LINE

心平「先生…元気か？俺は…まあまあ元気してる。田舎に戻って家の仕事手伝うようになって、

最初はもつとギクシヤクするかと思ってたんだけど…そんなこと全然無かった。俺、気が付いたら笑いながら親父やお袋と喋ってたんだ。なんていうか…家族とか大事な人との繋がりがって、そんな簡単に無くなったりしないんだってそう感じた。だから俺…先生ともいつかまた、一緒に笑って話がしたいです！そんな日が来ることを信じて頑張ります」

ハナ「先生ゴメンね！先生も凄く大変だった筈なのにアタシ自分の気持ちばかり押し付け

ちゃった。でも、先生も悪いんだからそこはちゃんと謝ってよね！あの時…先生に色々言われて何も言い返せなかった自分が凄いい情けなかった。だからアタシ自分の夢にもつと本気になる！親も友達もそれから先生の事も絶対見返してやるんだから！ナメんじゃねーぞ！」

光子「先生……私は先生に救われました。自分の全部を嫌いになってしまいそうだった時、私の描いたマンガを褒めてくれた事一生忘れません。今度は私が先生の事を助けたいです。アシスタントとしてではなく、プロの漫画家になって、いつか必ず……」
それまでどうか、お体に気を付けて」

太蔵「殴って悪かった！俺ももう一度頑張るから、先生も頑張れ。夢喰なんか負けんなよ」

絵・一の部屋

葵「みんな、ずっといちくんの事想ってくれてたんだよ？それぞれが自分に自信を持てる様になつたらまたこの家に集まろうって、そう話してた。忘れないでねいちくん、いちくんは独りなんかじゃないんだから」

一「うん……うんっ……！」

葵「それから、いちくんは今までの事を全部話してくれた。私の事、マンガの事、そして夢喰の事。全部を話し終えたいちくんは、まるで泣きつかれた子供のようにならかな顔で眠りについた」

暗転

絵・夢の世界

夢喰「おや、もうお会いする事は無いと思っていましたけど……何か御用ですかセンセイ？」

一「夢喰さん、前に言っていましたよね？夢に敗れた人間の怨念の集合体、それがあなただって」
夢喰「その通りですが、それが何か？」

一「確かに、夢を叶えるまでには数えきれないほどの困難があります。自分を見失ったり他人を傷つけてしまう事だってある。でも……それだけじゃないんですよ」

夢喰「なら、他に何が有るといいますか？」

一「困難を乗り越えた先には喜びがあります。自分の成し遂げた事で誰かから褒められたり笑顔になつて貰える事に生き甲斐を感じるんです。夢の悪い側面ばかりに囚われて

僕はそんな事さえ忘れてしまつていた。だからずっと苦しかったんです」

夢喰「理解出来ません、あなたが何を言っているのか私には……」

一「夢喰さん、あなたは理解出来ないんじゃない知らないだけなんだ。怨念から生まれ、苦しみだけを背負い続けたせいで夢を否定せずにはいられないのですか？そうじゃないんですか？」

夢喰「くだらない、あなたこそまだ分からないのですか？夢なんて見るだけ無駄だという事が。ホラ聞こえるでしょう、私を生み出した愚か者達の後悔と嘆きの声が！」

SE、怨念の声

一「……それでも、僕らは夢を見続けます。悩んで苦しんで傷ついて、時には折れてしまう事もあるかもしれない……けどもしそうなつてしまつても、また次の夢を見つければいい。夢を持つ心さえ無くさなければ、それでいいんです」

夢喰「不可能だ。そんな綺麗事を貫き通せる程人間は強くない」

一「あなたの言う通り人間は弱い生き物だ。独りでは夢を見続ける事なんて出来ないと思います。もし、あのままずっと独りで夢を見続けていたら、僕もやがて夢喰になつていたのかもしれない。でも、そんな僕を繋ぎ止めてくれた人がいた。独りじゃないつて優しく抱きしめてくれた人がいた。その暖かさに僕は救われたんです……だから今、僕は確信を持つて言えます。大切な人が隣にいてさえくれれば、人間は夢に負けたりなんかしない！！」

夢喰「口先だけなら何とでも言えます、私は人間の言う事など……」

一「なら見届けてください。これからの僕らの夢を」
夢喰「え？」

一「あなたはこれからも、僕の夢を食べ続けるんです。その代わりただ食べるんじゃないで、これからは同時に夢の素晴らしさも噛みしめて下さい。あなたが知らなかった事をこれから僕が嫌と言うほど教え込んであげます……ほら、これでまた利害が一致したでしょ？」

夢喰「なぜそうまでして……私はあなたを利用していたんですよ！？」
一「僕の孤独はたった3か月でしたけど……あなたはきつと、途方もないほどの時間あの苦しみの中に居たんですよ？それを思うと、どうしてもあなたの事を憎めなくなつてしまいました」

夢喰「……どこまでもお人よしな方だ。後悔しても知りませんよ？」
一「そつちこそ、途中で逃げ出したりしないてくださいよ？」

僅かに微笑み合う二人

夢喰「もしあなたが夢に敗れたら、その時は容赦なく喰らい尽くします。覚悟しておいて下さい」
一「分かりました……これで新たな契約の成立ですね」

画面が歪む

夢喰「サヨウナラ、センセイ。美味しい夢を期待していますよ」
一「さようなら、夢喰さん。お腹いっぱい召し上がれ」

暗転

7. エピローグ

葵「あれから1年の月日が流れた。私はいちくと同棲を始め、新しい夢に向かって

努力するいちくんを支える日々を送っている。そして今日は……それぞれの道を歩き始めた

みんなが、一堂に会する記念すべき日だ」

みんな「おじやましまーす!!」

明転、絵・一の部屋

心平「うーおー久しぶりだな先生の部屋！1年くらいしか経ってないのに、なんかすげえ懐かしいや」

葵「心平君は、実家の八百屋さんを継ぎご両親とも仲良く暮らしているみたい。本人曰く

『ギター背負って歌う八百屋さん』として近所の人気者なんだとか」

ハナ「ほんとほんと！あ、でも流石、葵さんが一緒に住んでるだけあってあの頃より部屋がキレイ」

葵「ハナちゃんは高校を卒業して、一人暮らしをすると同時にダンスの専門学校に通うになった。

彼女の夢をずっと反対していたご両親もついに根負けして、今では応援してくれているらしい」

光子「むう…私だっここでアシスタントしてた頃は結構気を使って奇麗に……」
倉持「光子『先生』、私本当に来て良かったのかしら？やっぱり場違いな気が……」

葵「光子ちゃんは念願叶って、オカルトを題材にした作品で週刊漫画の連載が決まった！
その担当がああ倉持さんだっ言うんだから、世間てのは本当に狭い物ね」

太蔵「よーし、じゃあ準備始めるか！メシの事なら俺に任せろ！」

葵「太蔵さんが昔定食屋をやっていたって聞いた時は本当にビックリした。でも、一度諦めた夢に
もう一回チャレンジすると語っていた時の太蔵さんは、ちよっただけカッコ良かったな」

心平「つーかハナ、お前なんでまだ制服着てんだ？もう高校卒業したんだろ」

ハナ「これでいーの！ここに遊びに来るときはいつも制服だったから、今日はこの格好で

来たかったんですー！」

心平「へーそんなもんか…でも全然違和感ねーな。お前ちゃんと成長してんのか？」

ハナ「失礼な！グングン大人の女に成長してるっての！専門学校でも男子に声かけられまくり

なんだからね！」

心平「え…？」

ハナ「ん？」

ハナ「何今のリアクション、もしかしてヤキモチ？ねえねえ妬いちゃったの！？」

心平「ば、バカなこと言ってるじゃねーぞ！俺は今ギターと野菜が恋人でだな……」

ハナ「心平クン顔真っ赤ー！！」

心平「うるせえ！！」

光子「青春ですね……」

倉持「若さが眩しいわ……」

太蔵「なーに枯れた事言ってるんだよお二人さん、何なら今度俺がお相手……」

二人「お断りします」

太蔵「Oh……」

心平「なあ葵さん、先生まだかよ？」

ハナ「もー待ちくたびれた！主役が居なくちゃパーティー始めらんないのに！」

葵「あく……もうちょつと待ってあげて、いちくんならそろそろ……」

一・秋治 I N

一「ただいまー」

秋治「お邪魔します！」

光子「先生お久しぶりです！……と？」

太蔵「だれ？」

一「ああ、紹介します。彼は……」

秋治「ども、市原秋治です！ハジメのダチで今日はお呼ばれしちゃいましたー」

心平「市原秋治って……あの？」

ハナ「ウソ！？」

秋治「へえ……この人達がハジメが話してた仲間か……みんな面白そうな顔してんな！」

葵「ちよつと秋治くん、いきなり失礼な事言わないの」

秋治「あーワリイワリイ、そういうつもりじゃなかったんだけどつい……」

倉持「桜井君、市原先生……あの話は本当なの？」

光子「あの話？」

太蔵「なんのことだ？」

一「はい、本当です。僕と秋治くんで、コンビを組んでマンガを描く事になりました！」

みんな「ええええええ！？」

心平「でも……二人って、その……」

ハナ「仲直りできたの？」

秋治「おう。ハジメからせくくんぶ聞かされて、とりあえず俺が一発思いっきりぶん殴って、

それで全部チャラって事になった」

太蔵「そ、そんなんでいいのか……」

光子「それで……どうして二人でマンガを描く事に？」

一「右腕の動かなくなつた秋治くんと、多くの人の信賴を失つた僕。一人では無理でも二人でなら夢を叶えられるはずだつて、そう思つたんだ」

秋治「その為に左手一本で書く練習をずつとしてきたんだ。今なら何とかネームを描くくらいは出来るようになったんだぜ」

倉持「市原先生がストーリーを考へて桜井君がそれをマンガにする。どうなるか想像もつかないわね……でも、だからこそ面白そうだわ！」

一「これから先、きつとまた沢山の困難が待ち受けてると思います。でも何も不安はありません、僕には……みんなが居てくれるから」

葵「いちくんと秋治くんならきつと掴めるよ。新しい夢を」

一「もちろん、葵ちゃんも一緒だよ！」

葵「うん！！」

葵「私の今の夢は、大好きな人達の夢を応援する事。いつか彼らが、その夢を叶える事を信じて……」

一「さあ……次はどんなマンガを描こうかな！」

完